



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	学級経営のあり方を方向づける潜在的要因としての小学校教師の思考と行動の様式：文学作品を手がかりとした教師文化に関する探索的研究(論文要旨)
Author(s)	佐藤,郁子
Citation	
Issue Date	2015-03-17
URL	http://hdl.handle.net/2309/138951
Publisher	
Rights	

氏名	佐藤 郁子		
専攻分野の名称	博士（教育学）		
学位記番号	博甲第 242 号		
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 17 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 課程博士		
学位論文名	学級経営のあり方を方向づける潜在的要因としての小学校教師の思考と行動の様式—文学作品を手がかりとした教師文化に関する探索的研究—		
論文審査委員	(主査)	教授	平野 朝久
	(副査)	教授	犬塚 文雄
		教授	堀内 かおる
		教授	天笠 茂
		教授	佐々木 幸寿

学位論文要旨

本研究は、教職という職業経験から形成される小学校教師の思考と行動の様式を探索的に追究することを目的としている。それを現在に限らず、近代日本の小学校教師が登場した明治以来の時間軸と空間軸のなかでとらえたいというのがその主旨である。現在の教師をめぐる課題を検討するに当たって、教師個人の資質や能力の問題としてではなく、文化とも言うべき、小学校教師特有の思考・行動様式をも考慮することの重要性を指摘している。

現在において、教師の存在そのものを主題とする教師研究は、「今この時の教師」とのかかわりを重視する研究傾向へ移行している。学校教育を取り巻く状況が刻々と変化を続ける中で、研究対象である教師がもはや、かつての教師研究が共有し得た一般性の高い静的な枠組みをとおしてとらえきれなくなったからである。時間においては「今この時」＝現在に、空間においては日常の活動場所である学校や教室＝「ここ」に、しかも教師の間近＝「そば」に集約される傾向をもつ現在の教師研究は、「リアリティ」には富むものの、現在の教師を相対化して理解しようとする視点は総じて乏しくなる。

本研究は、現在の小学校教師を、明治以来の日本の小学校教師の系譜上に位置づけて理解したいという問題意識から、過去との連続線上でとらえようと試みる。「今日ほど」と強調される現在の教師をめぐる課題や状況が、確かに現在固有の問題なのか、あるいは現れ方や程度の差はあるものの、その本質は過去の教師の問題を受け継ぐものであるのかを確認しようとする。

第 1 章の序論を受けて第 2 章では、本研究における重要な概念である「学級経営」を定義した。これまでの学級経営概念に関する諸説を整理したうえで、わが国最初の学級経営論（＝澤正の学級経営論）が、定説とされてきた訓育論ではなく、現在言われるところのカリキュラム（教育課程）論にもとづいていたことを明らかにした。本研究においても、学級経営を、学級教育のすべてを領域とする、学級教育の内容充実を図るための教育経営であると定義している。

第 3 章では、教師文化の存在とその具体的様相をすくい集めるための基礎作業として、小学校教師を登場人物とする日本の近現代文学作品を、時代を追って、通史的に検討することを試みた。その結果、明治期から現代までを通して共通して認められる教師の状況と、その状況から引き出

される諸特質を6つの観点から提示した。さらにそれらの特質が学級経営に与える影響について論じた。

第4章では、文学作品の分析をとおして引き出された諸特質が、現実生活における教師の思考と行動に反映されているのかを見極めようとした。文学作品の分析結果を質問項目とする、量的調査の結果から、現在の小学校教師の思考と行動の様式は、2つの類型としてまとめられた。第1は「教育志向型」である。充実感ないしは消耗感を伴いながら教育を志向する群であった。第2は「外部承応型」である。充実感や消耗感と必ずしも関連をもたずに、他者からの期待に応えることを目標として教育活動を遂行する群であった。

第5章では、前章で得られた量的調査結果の裏付けを求めることを主眼として、自由記述内容の質的検討を行った。その結果、前章で認められた「教育志向型」の教師たちの中に、充実感を伴いつつ教師の仕事を肯定的に語る群と、消耗感を伴いつつ問題把握的に語る群が確認された。このことから「教育志向型」に属する教師を以下の2つの下位型に分類した。その1は「内部志向型」である。充実感を伴いながら教師内部にもつ教師の仕事の本質的な価値に従って教育活動を行おうとする群である。その2は「内部と外部の葛藤型」である。教育を重視しつつも、結果として外部の要請や期待である校務を優先させてしまうことによって、消耗感を伴いつつ仕事を遂行する群である。

以上のことから、現在の小学校教師の生き方は、大きく「教育志向型」と「外部承応型」とに二分されたうえで、さらに「教育志向型」の教師の中に「内部志向型」と「内部と外部の葛藤型」の2つの下位型が認められた。このうち、明治以来の文学作品において典型的に認められる教師の生き方は「内部と外部の葛藤型」である。それゆえ、現在をも含む小学校教師の思考と行動の様式を「内部と外部の葛藤型」としてまとめ、その様式が学級経営のあり方を方向づける潜在的な要因となることを指摘した。

わが国においてはこれまで、さまざまな教師像が語られてきたが、今なお小学校教師の思考と行動を内側から規定している教師像は、公僕としての教師像であろうと推察できる。教師が他者との間に何らかの葛藤を生じた場合には、思考においては教師内部にもつ基準や価値を希求しながらも、行動においては外部の基準や価値が優先される傾向が認められる。理念と実際あるいは思考と行動の分離や不一致が、教師の消耗感を誘発させるのではないかと総括された。また、本研究を通じて検討された、教師の仕事に内在される種々の次元を異にする二面性が教師の葛藤の要因であるがために、解決の困難な問題であることも明らかにされた。

本研究は、実証的な教師研究に歴史的な視点を加えることによって、現在の教師を近代日本の小学校教師の系譜上に位置づけてとらえようとした点に独創性を有する。現在の教師をめぐる問題は「今この時」の問題であると同時に、明治以来解決されることなく継承されてきた問題でもあると理解することによって、その本質が見えてくるのではないかと期待される。